

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26580065

研究課題名(和文)世界文学と人文教育 理論的検討と教育現場での実践

研究課題名(英文)World Literature and Literary Education: Theoretical Reconsideration and Practical Education

研究代表者

野中 進 (NONAKA, Susumu)

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：60301090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の課題は(1)近年の文学研究において優勢な「世界文学」の概念と枠組みを再検討することである。また(2)日本の大学教育において「世界文学」の枠組みが果たしうる役割を検討すること、さらに(3)実際に大学の授業で「世界文学」の枠組みを用いた実験的授業を実施し、(1)(2)へのフィードバックを行うことである。

研究成果の概要としては、(1)「世界文学の文脈における日本文学」という主題に絞り込み、海外の日本文学研究者との共同研究を行ったこと、(2)研究代表者と分担者で勤務校において共同授業を計2 Semesterと1クォーター行い、今日の大学生にどのように文学教育を行うべきを実践的に検討したことにある。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this research project were (1) theoretical reconsideration of the notion and method of "World Literature" which has gained a considerable influence in today's literary studies, (2) investigation of possible contributions of this method to the literary education at Japanese universities, and (3) practical education trial in which we made a point of the notion and method of World Literature.

Our results are (1) in order to get concrete results, we have made a thematic specialization in "Japanese Literature in the context of World Literature", in which we held a joint research with some international specialists in Japanese literature. (2) We held a joint lectures where we made a point of the context of World Literature (2 semesters and 1 quarter) at Saitama University.

研究分野：文学理論、ロシア文学

キーワード：世界文学 文学教育 日本文学 旧ソ連諸国

## 1. 研究開始当初の背景

大学における文学研究と文学教育をめぐることは難しい状況が続いている。「各国文学」や「教養教育」、「哲・史・文」など、かつて大学における文学研究と文学教育を支えた大きな枠組が崩れ、文学が人文的知の中で占める位置が不安定になって十年以上がすぎている。総合的な自己再定義ができていないことが、文学研究・教育の大学における位置づけを不安定なものにしている。

そうした中、世界的に近年注目されている枠組に「世界文学」がある。日本でもD・ダムロッシュ『世界文学とは何か』(国書刊行会、2011年)が翻訳されるなど、紹介・導入の動きが起きている。これは、文化的グローバル化の中、文学テキストの生産と消費プロセスの世界化(移民文学、翻訳、市場など)に焦点を当て、新しい視点から文学研究を行おうとするアプローチである。前述のような困難に置かれている日本の大学における文学研究・文学教育を活性化する方法として有効なアプローチと考えられている。関連学会(たとえば「世界文学・語圏横断ネットワーク」など)も組織されるに至った。

だが、その一方で「世界文学」の概念に対しては疑問や批判も投げかけられてきた。批判の内容としては、「世界文学」の定義や方法論が明確でないこと、従来の文学研究(各国文学や比較文学などを軸とした)に対して何が学問的に新しいのかがはっきりしていないことなどがある。研究面での批判は、教育面でもその原則性、教育効果などの問題として繰り返されてきた。

本研究計画は、一方では「世界文学」がもつ可能性に注目し、他方ではその学問的厳密性や教育効果などの点に留意し、その検証を総合的に行おうとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、(1)近年の文学研究において優勢となりつつある「世界文学」の概念と枠組を再検討することである。それとともに、(2)日本の大学教育において「世界文学」の枠組が果たしうる役割を検討すること、さらに(3)実際に大学の授業で「世界文学」の枠組を用いた実験的授業プログラムを策定・実施することで(1)(2)の分析へのフィードバックを行うことである。

従来、日本の大学の文学研究・教育では各国文学の枠組が伝統的かつ優勢であった。しかし、近年、大学において顕著な傾向として世界文学の枠組の導入の試みがなされている。この枠組みは、グローバル化に伴う文学の「世界化」(移民・越境などのテーマの優勢、翻訳の国際市場化、映画など多ジャンルへの翻案)という現代的状況に触発されつつも、現代のみにとどまらず、文学史の書き換えを新しい視点から行おうとする

試みである。文学教育においても新しい方向性を打ち出すものとして期待されている。

その一方で、日本における各国文学研究の蓄積は世界的に見ても高いレベルにあり、その伝統が研究面でも教育面でも短期間に世界文学にとってかわられることは考えにくい。各国文学と世界文学の分化と交流のプロセスは、日本の大学界である程度時間をかけて進むと予想される。

その意味で、世界文学/各国文学の相関を方法論的に検討することは時宜を得ており、各々の対象・方法・傾向を理論的・歴史的に対比する作業は、今後の日本の文学教育に有用な実践的知見を加えることにつながるだろう。

## 3. 研究の方法

本研究では、一般的レベルでの分析・議論を研究チーム内で行う一方で、研究分野のより具体的な設定を行うこととした。それが「世界文学の文脈から見る日本文学の研究と教育」である。分野設定をよりはっきりさせることで、具体的な研究成果をあげやすくすることがその理由である。

具体的には、日本語・日本文学研究の独特な蓄積がある地域ということで、旧ソ連諸国を選び、コンタクトを取ることのできたロシア、ウクライナ、アルメニア、リトアニア、エストニア、ベラルーシ、ウズベキスタン、カザフスタンの日本文学研究者・教育学者との国際研究チームを構築し、それぞれの国における日本文学受容と日本文学教育の現状と歴史について共同研究を行うという方法をとった。

その際、チーム全体の共通論点として重視したのは、各国での日本文学の受容の歴史(翻訳、研究など)現在の学校教育(初等・中等・高等教育)においてどの程度日本文学が教材利用されているか、学生たちはどのように日本文学を受け止め、全体として日本文学がその国の文学教育においてどのような役割を果たしていると考えられるか、等の点である。

本研究のもう一つの柱として、代表者・分担者の本務校(埼玉大学)における文学教育で「世界文学」の文脈を強く意識した共同授業を設計し、実施することとした。その際、文学離れが著しいと言われる今日の大学生に対してどのように文学への関心を持たせるかについて授業実践を通じて考えるとともに、自分の専門分野に縛られがちな大学教師の側もどのようにして授業の枠組を広げられるかという点についても省みることとした。授業設計・実施に際しては教員間で密に連絡を取り合い、教材、論点、課題などについて工夫を凝らすこととした。共同授業は複数セメスター/クォーター行うことで、より確実な知見を得られることとした。

上記二点以外にも、各研究者がそれぞれの

研究分野で「世界文学」の文脈を従来より強く意識した研究を行い、それぞれの関連学会・媒体で成果報告を重ねることとした。

#### 4. 研究成果

「世界文学の文脈から見た日本文学」研究チームでは、2015年8月3-8日、千葉市で開催された第9回国際中東欧研究評議会（ICCEES）において「旧ソ連諸国における文学教育」という研究パネルを組織し、様々な国の文学研究者・教育学者との討論を行った。

その成果も踏まえつつ、共同論集『世界のなかの日本文学 旧ソ連諸国の文学教育から』（埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書、2016年）を発行した。この論集ではソ連時代から日本語・日本文学研究のレベルの高い旧ソ連諸国における日本文学受容・教育の現状と歴史の研究を行った。

その結果、明らかになったのはソ連時代の遺産として各国に共通の傾向が見られる一方で、ソ連崩壊後の四半世紀を経て、それぞれの国の独自の日本文学受容・教育が生まれつつあるという状況である。

たとえばウクライナでは日本文学が文学教材としてかなり積極的に用いられている。本プロジェクトにも参加したポルタワ教育大学教授のオリガ・ニコレンコ氏は、自身が編集者をつとめる教科書で積極的に日本文学（民話、俳句、芥川龍之介、川端康成他）を用いているが、それらが学校生徒たちにどのように受け止められているかについて興味深い分析を行った。

また、カザフスタンのサウレ・アビシェワ教授（カザフ教育大学）はアスタナで日本文学の催しを複数回行い、カザフスタンの大学生・学校生徒たちがどのように日本文学を受け止めたかについて紹介・分析している。

エストニアやリトアニアなどでは日本文学教育はもっぱら大学に集中しているが、その分、研究の水準の高さと次世代の研究者の育成が順調に進んでいることが明らかになった。

逆に、中央アジアでは日本文学への関心は高いものの、翻訳はもっぱらロシア語訳を介しての重訳であるという事態が浮き彫りになった。ただし、重訳が即「遅れた現象」であるとは言えず、現代のようなグローバル化された世界では、英語やロシア語のような「中継言語」が文学の普及に大きな役割を果たすと言われているが、そのことが確かめられた。

研究代表者は総括論文“Japanese Literature in Post-Soviet Countries: An Overview of Some Results of a Collaborative International Project”（上掲論集 pp. 137-144）を執筆した。この論文の元となった報告はウクライナのポルタワ教育大学で行われた国際会議「外国文学とウクライナ」での招待講演である。講演に際し

ては、日本文学が旧ソ連諸国という独特な文化空間において果たす役割について活発な議論が交わされた。

『世界のなかの日本文学 旧ソ連諸国の文学教育から』への寄稿者の多くは、出版の前後に来日し、調査研究を行うとともに、埼玉大学で一般公開の講演・特別授業を行った。これにより、日本の一般読者たちは自国の文学が外国でどのように受容され、教育されているかを知ることができた。これも実践的アプローチを重んじた本研究プロジェクトの成果の一つとして挙げるができるだろう。

埼玉大学における実験的授業について述べると、代表者と分担者で共同授業を2セメスター（平成27年度）1クォーター（平成28年度）行った。本授業を行うに当たっては、とくに二つの関心があり、（1）今日の教養教育において文学教育が占めるべき役割を「世界文学」という観点から問い直す、（2）教員側も「各国文学」という従来の専門の枠から外れてどのような文学教育を行うことができるか、また行うべきか、の二点である。（1）について言えば、一般的に読書離れが指摘されている学生、とりわけ人文的関心が薄いと思われるがちな理系学生に対しても、文学の授業は十分知的関心を惹起するものとなることコメントペーパー、授業評価アンケートなどから確認された。その際、従来の各国文学の枠や「日本文学/外国文学」の枠にとらわれず、世界的一般性と地域的特性に注意を向けさせる方が学生の関心・理解を導きやすいことも観察された。（2）については、教員が自分の専門（ロシア文学、ドイツ文学...）にこだわらず、文学全体についての授業を行うことは大学の現状から言って重要であるという考えの下、本授業の担当者たちはさまざまな国の文学を教材に用いた。その結果、論点の工夫をすることで、専門以外の言語・地域の文学作品も教材にすることは十分可能であり、自らの専門分野に対する視座の変化に影響をもたらすことが確認された。とりわけ、毎回授業後に複数の担当教員で授業進行について討議を行うことが有効であることが分かった。

このように、世界文学という概念の学術的妥当性・教育的有用性について、「世界文学の文脈から見る日本文学」という研究プロジェクトと世界文学に関する共同授業の実施という二点から検証することができた。これが本研究プロジェクトの成果である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

大久保譲「大学の二つの身体」【査読有】

『ヴィクトリア朝文化研究』2016年、14号、89-93。

野中進「書評：安井亮平『ソ連文芸クロニクル 1893～1991』『ロシアわが友』【査読有】『ロシア語ロシア文学研究』2016年、48号、187-193。

フランク・ピオンテク(著) 松原良輔(訳)「海外ワグナー文献二〇一五」【査読有】『日本ワグナー協会編ワグナーシユンポシオン 2016』2016年、148-154。

杉浦晋「書評：奥山文幸著『幻想のモナドロジー：日本近代文学試論』」【査読有】『日本文学』2016年、65号、98-101。

野中進 «Семантика поэзии и пропаганды: тыняновский проект», "Страна филологов": проблемы текстологии и истории литературы: к юбилею члена-корреспондента РАН Н. В. Корниенко. М.: ИМЛИ РАН, 2015. С. 428-436. [「詩とプロパガンダの意味論：トゥイニャーノフの企て」『文学者たちの国：文献学と文学史の諸問題：ナターリヤ・コルニエンコ・アカデミー準会員記念論集』モスクワ：世界文学研究所、2015年、428 - 436] 【査読有】

野中進 «Противостояние лиризма и антилиризма как момент эволюции творчества А. П. Платонова («Однажды любившие» и др.)», Е.А. Яблоков (ред.). Поэтика Андрея Платонова. Сб. 2. Новые территории. М.: Совпадение, 2015. С. 7-17. [「アンドレイ・プラトーノフの創造的進化における抒情性と反抒情性の相克(『かつて愛し合った者たち』他)」エヴゲーニー・ヤブニコフ編『アンドレイ・プラトーノフの詩学 第2集：新しい領域』モスクワ：ソフパジェーニエ社、2015年、7 - 17] 【査読有】

野中進 «Ситуативное сравнение в «Чевенгуре»», *Зборник магице српске за славистику*. Нови Сад, 87 (2015). С. 199-212. [「『チェヴエンゲール』における状況の直喩」、『セルビア・スラブ学会論集』ノヴィ・サド、87 (2015). 199-212] 【査読有】

杉浦晋「書評：渡辺喜一著『石川淳傳説』」【査読有】『日本近代文学』2014年、94号、317-317。

松原良輔「ヴァーグナーとグランド・オペラ—リエンツィ」を中心に」【査読有】『日本独文学会研究叢書』2014年、105号、17 - 30。

〔学会発表〕(計 6 件)

野中進 «Как выражение получает свою форму и утешает человека. К одному мотиву в письмах А. Платонова» (表現はいかにその形を得て、人を慰めるか—アンドレイ・プラトーノフの手紙の一節から) 【原文ロシア語・招待講演】国際会議「ロシア—日本哲学会議」サンクトペテルブルグ大学(サンクトペテルブルグ、ロシア連邦)、2016年9月20日。

野中進 «Japanese Literature in Post-Soviet Countries: An Overview of Some Results of a Collaborative International Project» (旧ソ連諸国の日本文学：共同国際プロジェクトの結果の概観) 【原文英語・招待講演】国際会議「外国文学とウクライナ」ポルタワ教育大学(ポルタワ、ウクライナ) 2016年3月16日。

野中進 «Толстой, Платонов и другие писатели с точки зрения фигур и тропов» (比喩から見たトルストイ、プラトーノフ、その他の作家) 【原文ロシア語】第9回国際中東欧研究評議会(ICCEES) 神田外語大学(幕張、日本) 2015年8月7日。

野中進 «Война и тропы: метонимический принцип В. Гроссмана» (戦争と比喩：V.グロスマンのメトニミーの原理) 【原文ロシア語】刻まれた勝利：主形象、概念、イデオロギー素 第二次世界大戦終戦70周年記念学会、ロシア文学研究所(サンクトペテルブルグ、ロシア連邦) 2015年4月29日。

野中進 「アンドレイ・プラトーノフの創造的進化における抒情性と反抒情性の相克(『かつて愛し合った者たち』他)」日本ロシア文学会第64回全国大会、山形大学(山形、日本) 2014年11月1日。

野中進 「Ситуативное сравнение в «Чевенгуре» (プラトーノフの長編小説『チェヴエンゲール』における状況の直喩) 【原文ロシア語】第8回国際プラトーノフ学会、世界文学研究所(モスクワ、ロシア連邦) 2014年9月27日。

〔図書〕(計 2 件)

野中進・初内裕子・沼野恭子(編)『世界のなかの日本文学—旧ソ連諸国の文学教育から』埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書、埼玉大学教養学部・人文社会科学研究所、2016年。148p。

Valerij Gretchko, SooHwan Kim, Susumu Nonaka (eds.), *Far East, Close Russia: The Evolution of Russian Culture—A View from East Asia.*

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

<https://nonakasusumu.jindo.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

野中進 (NONAKA Susumu)

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：60301090

(2)研究分担者

松原良輔 (MATSUBARA Ryosuke)

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：30239074

杉浦晋 (SUGIURA Susumu)

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：90235870

大久保譲 (OKUBO Yuzuru)

専修大学・文学部・准教授

研究者番号：70302825

(3)連携研究者

( )

(4)研究協力者

( )